

北社会ニュース ㊦5号

2004・8・18

発行・世話人会（文責・鈴木壮夫）

本日、224回北社会講師に東北大学川島隆太教授をお迎えして「脳を鍛える学習療法」を直に拝聴できますこと大きな喜びです。年明け早々、川島教授の脳を鍛える大人の二冊を新聞で知り、翌日購入しました。早速問題を解いている内に、これは94才の母とのコミュニケーションに役立つと直感しました。母は緑内障が進行して一年前から字が読めません。ですから、私が問題を読んで、回答させました。思いの外、すらすらと正しい回答がかえってきました。短時間ですが、母も楽しそうです。私も安心しております。最近の新聞報道では昨年末発売以来148万部というベストセラーになり、火付け役になられたこと、皆さんご承知の通りです。

私のように還暦を過ぎると「ボケ」は身体の衰弱とともに避けられないもの一運命と多くの方があきらめていました。しかし努力—それも小さな、お金もかからない—すれば活性化できるかもしれないと多くの方が知り始めました。素晴らしいことです。

再度「世のため」に役立つかもしれない、と自信を抱き始めた中高年に私も加わろうとしております。嬉しいことです。

北社会・来月以降の開催日

9月15日（水）18：00－20：15 会場：エドモンドホテル

「暑気払いを兼ねた会員による討論会」を開催致します。

討論会のテーマは「北社会運営」です。

準備資料として会員皆さんから率直なご意見・お考えが必要です。

本日配布しましたアンケートは必ずご記入の上、世話人までご提出下さい。

10月20日（水）時刻・場所は従来通りで同じです。テーマ等は9/15

討論会の結果で決めます。

北社会・年会費等について

下記の通り確認させていただきます。

年会費：Eメール連絡者 3,000円 葉書連絡者 4,000円

（非会員者は出席の都度1,000円。4回目以降無料）

毎月の会費は一人3,000円の予算で切り盛りしております。

当日、キャンセルの方は申し訳ありませんが、会費3,000円を後日ご負担下さい。

在京同窓会開催

10月12日（火） 夕方 ホテルオークラ

サッカー、日本語では「蹴球」中国語では「足球」。8月7日、いつもは疲れて蒲団にもぐりこんでいる時間だが日中決勝戦をTV観戦する。試合開始早々からレベルは日本が優位と判断、勝利を確信し続け3-1で優勝した。当然の結果だった。TV観戦時、1986-88年北京駐在員時代の「足球」に関する思い出が二つ頭を過ぎった。一つは日本人駐在員チームでサッカーをやっていたこと。新日鉄の管理職が世話人となりチームができた。私は中学・高校で「遊び」でやっていた程度だったがそれでも経験あるほうだった。ユニホームは合併で不用になった「八幡製鉄」の白地に赤い「Y」マークを日本から送ってもらった。人口密度の高い北京では一般の中国人が練習場を確保するのは困難なことであったが、私達は優先的に割り当てられゆったりと練習していた。ボールを拾いに金網まで走っていくと「日本人は遊びなのに本物のサッカーシューズを履いている」との批判(?)が聞こえた。中国人チームとの友好親善試合連戦連敗だったが楽しい時間だった。相手チームのゴール前に上がったセンタリングを右足で受け蹴りこんだのが私の唯一の得点だった。もう一つはある夜、宿舎であった北京飯店の部屋に長安街をデモる群衆の声が聞こえてきた。バルコニーから見下ろすが、何を叫んでいるかは聞き取れない。サービス台に聞きに行った。「今夕東京での中日サッカー戦に中国が勝利した。そのお祝いの行列だ」当時日本ではサッカーはマイナーな競技だった。「たかがサッカーではないか」とその時思った。駐在当時からもう20年弱になろうとしている。今回のアジアカップで「反日騒ぎ」が目立った。私は中国が好きで志望して北京駐在員になった。北京で生活を始めてハッと気付いた。ここは戦争に勝った国で我らは負けたのだと。多くの日本人は米英には負けたが中国には負けたとは思っていない。この意識の差も大きいと思う。「堂々と主張すること」が日本人としても個人としても中国人から尊敬されること私は肌で感じている。今回優勝戦の北京では警官一万人以上が配置された。それでも一部に過剰な行動があった。市場経済という経済的自由を多くの国民に浸透させておいて、統制はもはやできっこないと思う。日中混血児の孫(1・5才)は今月初めから父親の故郷を訪ねている。いつの日か「小日本!」と蔑まれる日もあるだろう。その時「堂々と主張できる」人間に育ってほしいと思う。

「かわいそうな象の話」

秋山ちえ子さんが今年8月13日、TBSで朗読した。約6分間の物語。戦争激化の昭和18年8月東京都は上野動物園に猛獣の処分を命じた。三頭のゾウは敏感で毒の入った餌を食べない。水と餌を絶つ餓死処置が取られ、絶食から三十日目最後のゾウが死んだ。タライほどの胃袋には水一滴なかった。衰えた身体でゾウは教えられた芸のしぐさをして餌をねだったという。今年もそばを打ちながら聞いた。目頭があつくなり、中断せざるをえなかった。当時動物園には多くの東京市民から哀悼の便りが届いた。鎮魂の一句。

「来たる世は人に生れよ秋の風」。読売・編集手帳は猛獣たちが生れてきて失望する人の世にしてはなるまいと結んでいる。この物語で処分せず仙台の動物園に移送する案もあった。しかし、仙台もその内空襲を受けるだろうからと廃案となった。今回、仙台のどこに動物園があったのかと故郷に問い合せた。大橋を過ぎて広瀬川は評定河原橋まで青葉城跡付近で鋭く蛇行する。その突端、今は「花壇自動車教習所」が動物園だった。

お5号の拙文、最後お礼状が読者のために書かれた。